

カフカス・カスピ海西岸を旅して

大賀 二郎

はじめに

カスピ海から長さ1,200kmに及ぶ大カフカス山脈が西に走り、黒海に達している。この褶曲山脈を背骨として亜寒帯針葉樹林帯、乾性サバナ、半砂漠など複雑な地形が展開している。この地方をカフカス（英語名コーカサス）と呼んでいる。アジアとヨーロッパを画する地域でもある。国家構成は、1991年、旧ソ連邦から分離独立したアルメニア、グルジアそしてアルゼバイジャンが一般的にカフカス3共和国といわれている。

この地域は古来、シルクロードの道筋であった。東西からの隊商やアレクサンダーなどの征服者たちも通った。自然、民族、文化など研究分野が多い。

長い間、旧ソ連邦の戦略地帯であり、現実に各施設の有無が取り沙汰されていたこともある。3カ国独立後、一般入国は自由となる。ただ3カ国管の宗教上の対立や国境の不確定要素が今も残っていて緊張状態が続いている。

1998年5月18日から同28日まで、この地方を旅行した。

自然観察、民族、写真などに関心をもつ20名で構成、秘境・山岳ツアー専門の旅行社が催行した。私は次の点に関心をもち参加した。

1. カフカス地方とカスピ海西岸の自然と生物相
2. 集落の訪問と民族資料の収集
3. 写真撮影

5月のカフカスは夏時間で最も美しい季節とされる。ロシア正教会には新緑が梢をかざし、廃墟の古城には真紅のノゲシが燃えていた。訪れた箇所は次のとおりである。

・アルメニア共和国

エレバン市、ガルニ神殿、ゲガルト洞窟修道院、セバン湖、スピタックの町など

・グルジア共和国

トビリシ市、ナリガル城塞、ソロラキ山、ムツヘタ市、カフカス軍用（山岳）道路、クダウリ、十字架峠、カズベキ、テラビなど

・アゼルバイジャン共和国

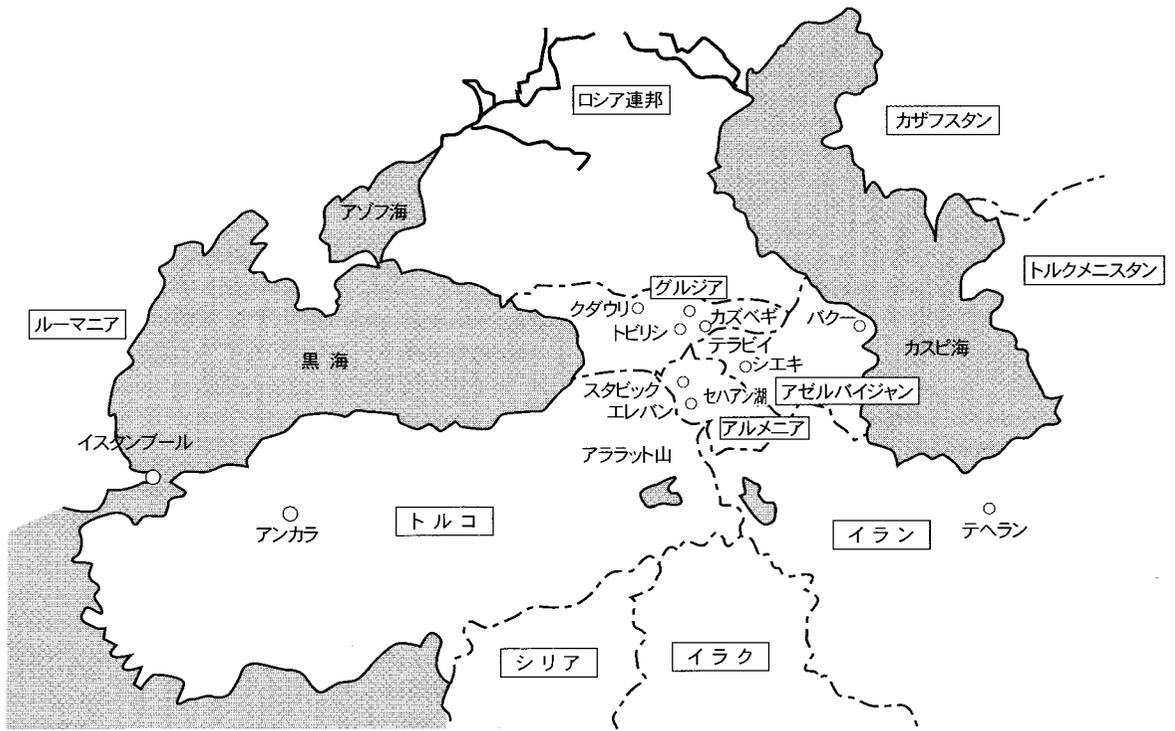


図1 カフカス・カスピ海周辺地図

シエキ、カスピ海西岸、バクー市、拝火教遺跡など
カフカスとカスピ海西岸の自然環境、文化、国状など
の現況や感じたことを次に取り上げた。

自然と共生する古都

モスクワに一泊。翌日午前のアエロフロートで5時間、アルメニアの古都エレワンに着く。ともあれ、近くの高台に上る。アララット山（海拔5,165m）を見るためである。夕焼けに染まり、氷河から雲が湧き上がっていた。ノアの箱舟が辿り着いたという聖書伝説の地である。宗教上の理由から登山禁止になっていて、地質学、生物学、考古学などの空白地帯である。眼下にレンガ色の古都がたたづんでいる。歴史博物館（生物学資料もある）、古文書保管所、バレエ劇場など主要建築物がこのあたりに集中している。

郊外にも見るところが多い。ローマ時代のガルニ神殿、絶壁直下のゲガルト洞窟修道院など宗教遺産や廃墟には草本の群落があった。大小の岩石が散財し、その間隙に種類ごとのテリトリーがある。ノゲシ（ロエメリア属）、アザミそれにキキョウ科、マツムシソウ科のものが目立った。洞窟には霊水があり、岩場の裂け目から小さな滝がかかっていた。通常このような環境にはシダ類、コケ類が見られるものだが、以外にも全くなかった。これは訪れたカフカスの各地についてもいえることであった。

グルジア国の古都トビリシは、岩山や渓谷の複雑な地形上に形成された。大自然と共生する都市といえる。ムトックバリ川の岩上にはベルシャ風のバルコニーを持つ古風な家々。丘陵にはロシア聖教会。中央丘にはナリガルの大城壁。対岸のソラキ山にはケーブルがあって展望公園になっている。谷底の渓谷には自然林をそのまま取り入れた植物園がある。岩場にはイワレンゲ類の群落が見られた。トビリシには花壇のような植栽があまり目につかない。野生のロックガーデンがどこにでもある。自然と共生する古都には人工的なものを必要としないだろう。

セバン湖はエレバンから1日行程。広大な淡水湖である。岩山に立つカラベツト教会と聖使徒教会からの眺望は絶景。清楚の野草の茂みには古代文字や装飾のある墓石が散在していた。湖にはマスが棲み、オオフサモが岸边に打ち上げられていた。

地震で壊滅したスピタックの町

セバン湖からグルジア国へは往古のローマ街道を通る。巨岩の露出した荒々しい原野とその間に農村がひっそりと点在している。スピタックの町もそのようなたたずまいであった。1988年2月7日、M8.2の地震がこの地方を襲った。局地的にはM9.2であったとみられている。

ブレジネフ支配のソ連邦時代、鉄筋コンクリートの強度の高層建築が進められていた。断層地帯を考慮してのことである。結果は裏目に出た。これらの建築物は瓦礫の山と化し、全人口2万人の70~80%が死亡した。

今日、ヨーロッパ諸国から送られたプレハブ住宅（平屋軽量鉄骨、ツー・バイ・フォ工法）が立ち並んでいる。地面上に直方体の箱を置いたような外観で、地震エネルギーがまともに伝わらない。地震に対してはいかに強大な建造物での対抗できない。軽い簡易な構造が実は一番安全なものだと結論に至ったようである。

町を見下ろす丘陵には慰霊塔がある。アーチ型の門をくぐると小さな教会がある。記念碑に文字が刻まれている。読めないがおよその察しはつく。野の花が溢れるばかりに供えられていた。

この地方には北アナトリア断層が走る。休火山アララット山を中心にトルコ、アルメニア、グルジアにかけて世界有数の活断層地帯である。

グルジア軍用道路

ロシアのウラジカフカスからカフカス山脈を越えて、グルジアのトビリシを結ぶ山岳道路がある。1799年帝政ロシアが軍事用に建設し、その後拡張が続けられ今では延長2000kmの大動脈となっている。

私たちはトビリシから僧院や城郭を訪れながら軍用道路に入った。断崖絶壁の連続で、夕刻クダウリスポートと呼ぶロッジにチェックインする。ここはカフカス山中の真っ只中、氷河を抱く岩峰のパノラマは類をみない。

翌朝、更に進むと海拔、2,384mの十字架峠に達する。岩間から天下の名水が溢れている。残雪のある湿原にはフキタンポポ、キンボウゲ、イワギキョウなど高山植物の群落があった。

ガズベキまではカフカスの名峰が次々に展開する。村落に着くと、眼前に第二の高峰ガズベキ山（海拔5,047m）が迫る。独峰で絶えず雲が流れていた。山麓の町テラビに下る。グルジアワインの産地で知られ。ホテルはすべて難民に占有されていた。仕方なく私たちは旧ソ連の貴賓館に案内された。かつては大統領など高官の別荘であったが、今は荒廃が進み雨漏れの跡がひどく壁も落ちていた。高塀に囲まれて森林があり、いくつも庭園があった。花壇は園芸植物と野生植物が混然としていた。

カフカス山間部の長寿村

グルジアからアゼルバイジャンの入国は特に厳重であった。3時間はかかったであろう。夕刻になったがシエキのバザールに寄りながら、その日はシルクロード時代のキャラバンサライに泊まった。中央に中庭があり、かっ

てはラクダをつないでいたところだ。シャワーの電気もなかったがよい体験になった。アゼルバイジャンには長寿村がある。100歳以上のものでも農耕や牧畜をしているという。世界最高齢者と言われるムスリモフ（男性で167歳。10数年前に死亡）もこの地方の人である。しかし、この地方の記録はソ連邦の時代、兵役を免れるために若干の上積み申告がされていたという説がある。それらがあつたとしても長寿村には違いない。

ヨーグルト、ミネラル、大気、労働そして共同体社会であることやストレスがないことなどがその要因と見られるが、民族に共通した遺伝特質があるのかもしれない。

湖か、海か、カスピ海

いよいよ最終地カスピ海に向かう。半砂漠はいつまでも続く。かつてはカスピ海だったところで塩分があり、植物は満足に育たない。

カスピ海が見えてきた。バクー市南部に着いた。沿岸も半砂漠である。遠く石油採掘のヤグラが林立し、その先にはバクー市の港湾施設が見える。このあたりは砂浜で白波が寄せていた。対岸はもちろん見えないが、中央アジアのカラクム砂漠が広がっていることだろう。岸边には打ち上げられた貝類の山。1～2 cmのものがほとんどで巻き貝も二枚貝もある。海浜植物のハマエンドウ、アカザなどや棘の鋭い砂漠植物もみられた。小さなタマオシコガネ、サバクトビバッタの姿もあつた。波打ち際で水を掬い、口に含むと鉍物質の感じとなめらかな塩の味がした。このあたりで塩分濃度は海水の二分の一程度という。浅いが水底の砂がよく見える。無色透明。海のようなこの塩湖にはどのような動植物が生育しているのか。興味のあるところだ。このあたりに限定すれば、海藻など海のものも、水草・淡水藻類など淡水のものも、ともに植物の姿はなかつた。打ち上げられた植物の片鱗もなかつた。

魚類ではサケ、チョウザメ、タナゴ、ニシンなどが食資源になっている。いろいろな種類が塩分濃度によって住み分けているという。カスピ海最深部は955m、地質時代に海から分離した海跡湖である。同じ海跡湖でも淡水のバイカル湖深部には特異な魚類、甲殻類の固有種が進化した。カスピ海にはそれがみられないという。

カスピ海の面積は37.1万km²。造船所があり、湖岸諸国の港がある。1952年ボルドガドン運河の開通によって外洋に通じた。黒海、バルト海そして地中海へ。今では海としての機能がある。カスピ海の水位は海面下 28mなので、運河には開門が取り付けられている。

おわりに

近年、カスピ海は大きくクローズアップされようとし

ている。世界最大規模の石油・天然ガス資源が眠っている。今のところ原油価格の低迷、採掘コスト、輸送手段などで大規模開発は手控えられている。ソ連邦時代の黒海に抜けるパイプラインは砂漠の中で錆びついている。しかし、開発はいずれ浮上してくる問題。カスピ海の領有はソ連邦時代にはイランとの2国間の問題であつたが、今はロシア、カザフスタン、トルクメニスタン、アゼルバイジャンおよびイランの5カ国にかかわってきた。これに欧米の石油資本の権益がからむ。カスピ海は地理的には内陸湖だが、法的には海とみる余地が残されている。それによっては関係諸国の利益が大きく異なる。

カスピ海の生物の実態はソ連邦の時代が過ぎて、しだいに明らかになってくるだろう。と同時に開発によっては固有の自然環境に影響がでないとも限らない。

カフカス山脈一帯は、今もアカジカ、ノロジカ、アイベック、オオカミ、ヒグマなどがひそやかに生息している。村落では昔からの放牧や農耕の営みがあり、自然環境との共生が今も続いている。

参考文献

- 林 弥栄・古里和夫. 1976. 原色世界植物図鑑. 北隆館. 東京.
- NHK取材班. 1984. 騎馬・隊商の道. 日本出版放送協会. 東京.
- 今泉古典ほか. 1972. アニマルライフ. 日本メールオーダー社. 東京.
- 本間三郎. 1992. PASPO (国際情報大辞典). 学習研究社. 東京.
- Brian D. Morley. 1970. Wild Flowers of the World. Ebury Press. Dublin.
- Anthony Huxley. 1974. The Encyclopedia of the Plant Kingdom Salamander Book. Belgium.



写真1 アザミの群落とアララット山
(海拔5,165m)

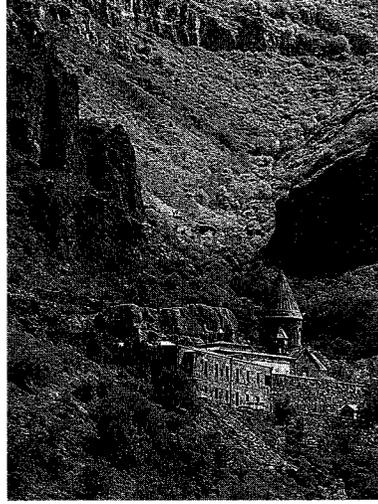


写真2 ゲガルト洞窟修道院



写真3 静寂のセパン湖

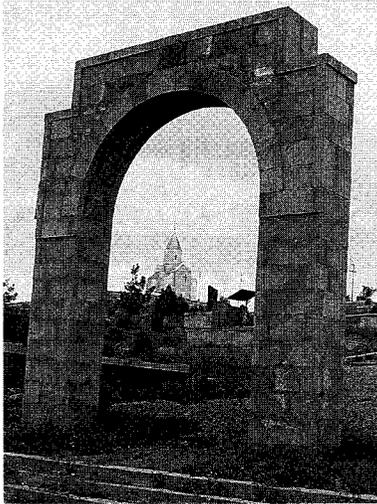


写真4 スピタック地震記念碑



写真5 旧ソ連貴賓館の野の花の混在する花壇

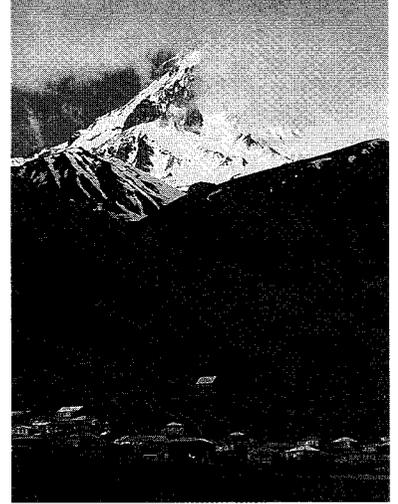


写真6 ガズベキ山 (海拔5,047m)



写真7 民家とアイリス



写真8 廃墟と植物群落



写真9 カフカスの長寿村

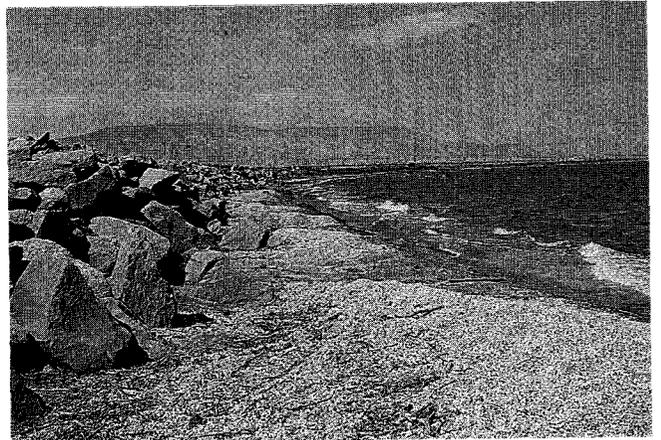


写真10 カスピ海西岸（打ち上げられた貝殻）

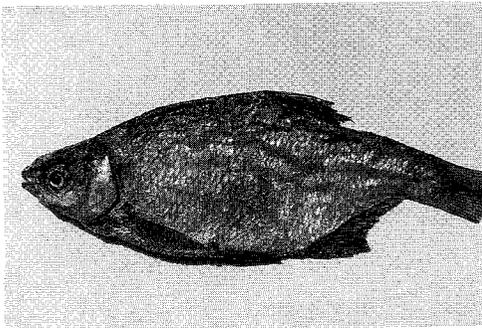


写真11 セバン湖の魚（干物）

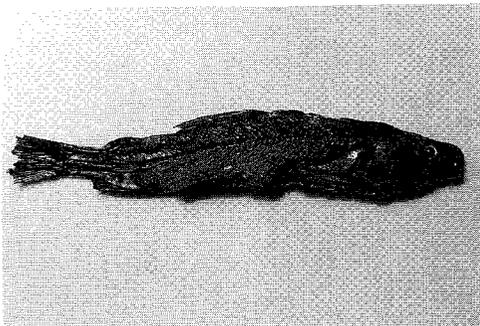


写真12 カスピ海の魚（燻製）



写真13 カスピ海の貝殻

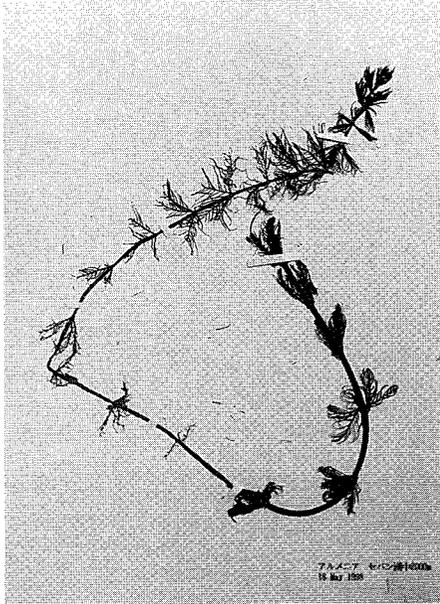


写真14 セバン湖のオオフサモ

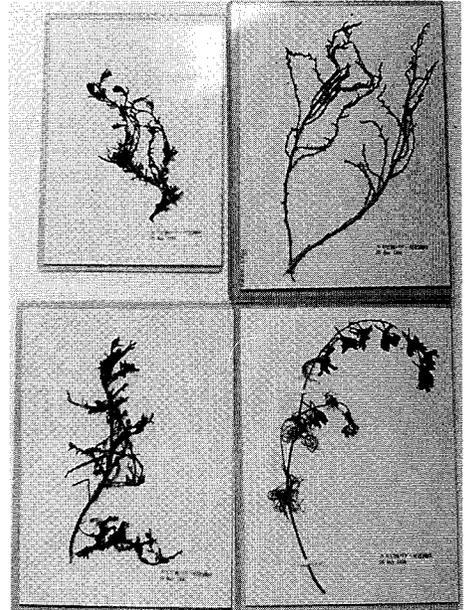


写真15 カスピ海沿岸の植物

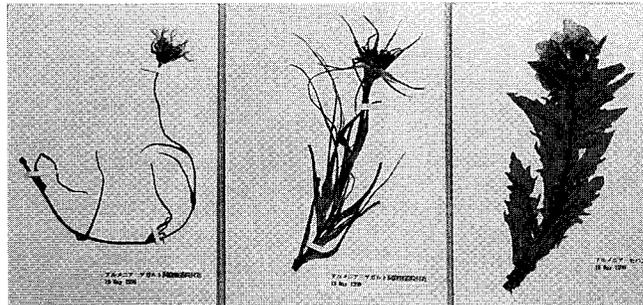


写真16 アルメニア礫地の植物

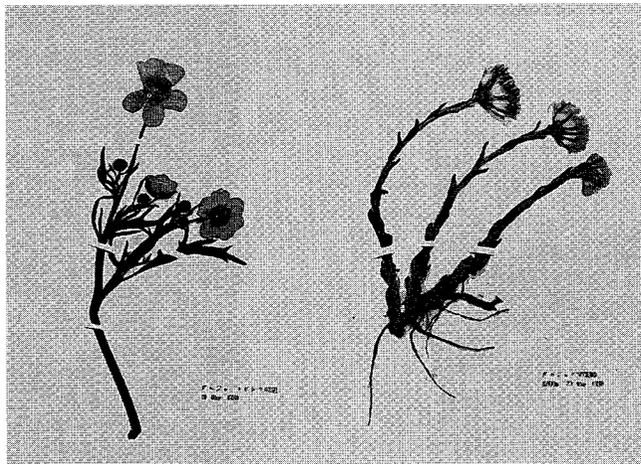


写真17 カフカス山脈の植物